第41回読売書法展
役員作品鑑賞ガイド

ごあいさつ

読売書法展は伝統と古典に基づいた書の継承と発展をめざして昭和五十九年（一九八四年）に始まりました。出品約一万四千点、東京展、関西展、九州展の三会場からのスタートでしたが、今回の第四十一回展には、約二万点が集まり、全国八会場（東京、関西、中国、四国、東北、北海道、中部、九州の各展）を巡回します。

読売書法会の発足以降、書壇を取り巻く環境は大きく変わりましたが、「本格の輝き」を標榜する読売書法展は方向性を見失わず着実に歩みを進め、今日では国内最大規模の公募展に成長しました。

本展は昨年、四十回の節目を迎えましたが、今年から新たな歩みを進めます。第三十八回展から始まった、高校生を中心とする若い世代からの出品数も年々増え、変化の時代のなかに新しい書の可能性を感じます。

読売書法会の役員書家は、古典を考証しながら新たな可能性を追求し、絶えず研鑽を重ねています。いまなお止むところを知らない旺盛な創作活動は、書法会の根幹を支えるだけでなく、現代書道芸術の発展に多大な影響を与え続けています。

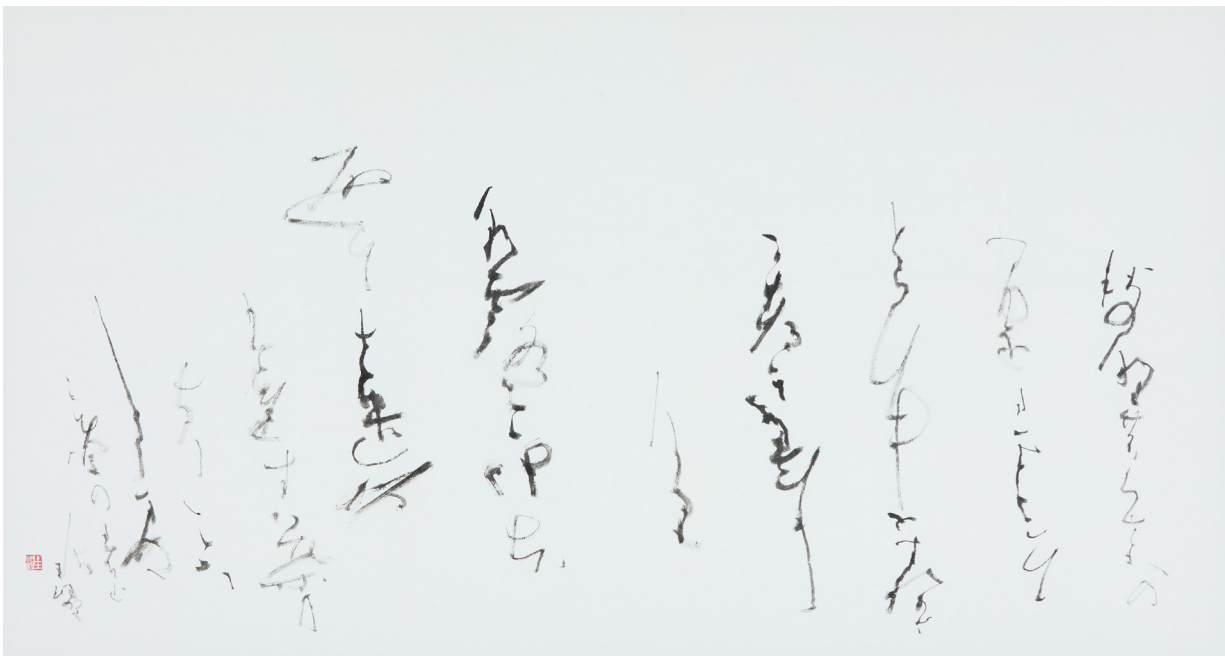
本紙には、国内書壇の最高峰を形成する最高顧問、顧問、常任総務らの作者自身による制作意図を紹介しておりますので、ご鑑賞の際の手引きとしてご活用いただければ幸いです。

令和七年八月

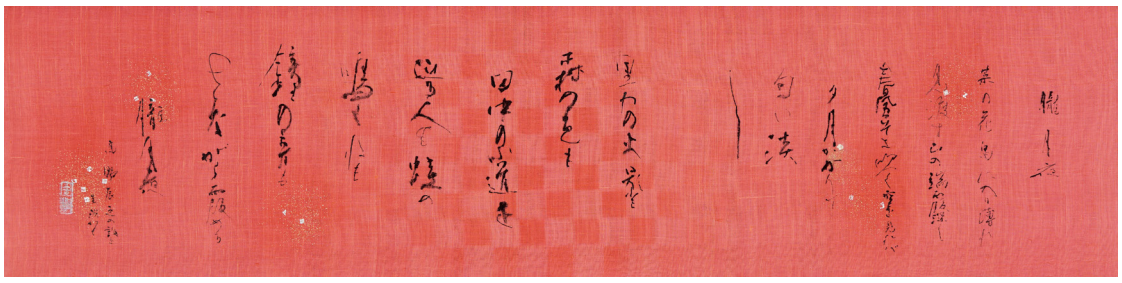
読売新聞社
読売書法会

最高顧問
井茂　圭洞

右：良寛の歌（良寛）
左：朧月夜（高野辰之）



書線は心臓の鼓動の軌跡　呼吸の形象化であるとの理念のもと心の動きの動静を表現した。



人口に膾炙された唱歌をかなの散らし書の章法等を利用して紙面の白の部分に動きを生じるように可読性を考慮して制作した。

最高顧問
黒田　賢一

右：朝霧（法性寺入道前関白太政大臣『新古今和歌集』）
左：松風（日野草城）

書作の基本とする「強い線と白」を根底に、大字がなの方向性を追求する日々である。

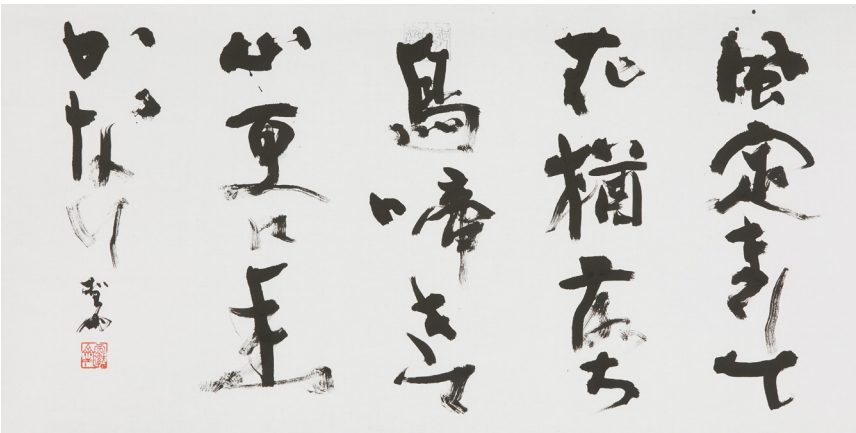
平易で読みやすい書表現と伝統的な形式を融合させ、少しでも芸術性豊かで魅力ある作にと、扇面に力強く表現した。

最高顧問

髙木　聖雨

右：磏勇（韓非子）
左：良寛詩句（良寛）

剛柔、曲直、疎密を意識し制作。磏字の重さを支える勇字の白と遊印に効果を求めた。



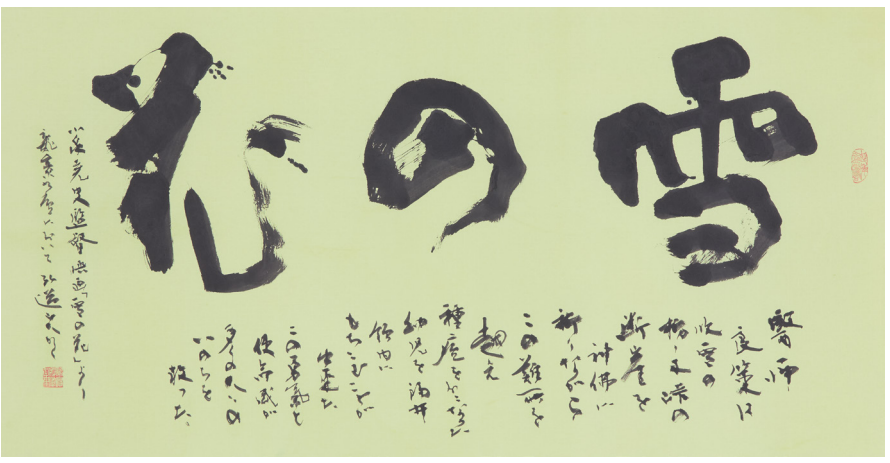
渇筆をテーマとした作。墨量によるもの、運筆の遅速による変化、渇筆にも種類がある。永遠のテーマである。

最高顧問

星　弘道

右：最要妙處（歐陽詢『唐歐陽詢傳授訣』）
左：雪の花（小泉堯史監督映画『雪の花』より）

細詳緩臨、自然に体を備う。此は是れ最要の妙處なり。書は自然体が一番大切であると言っている。



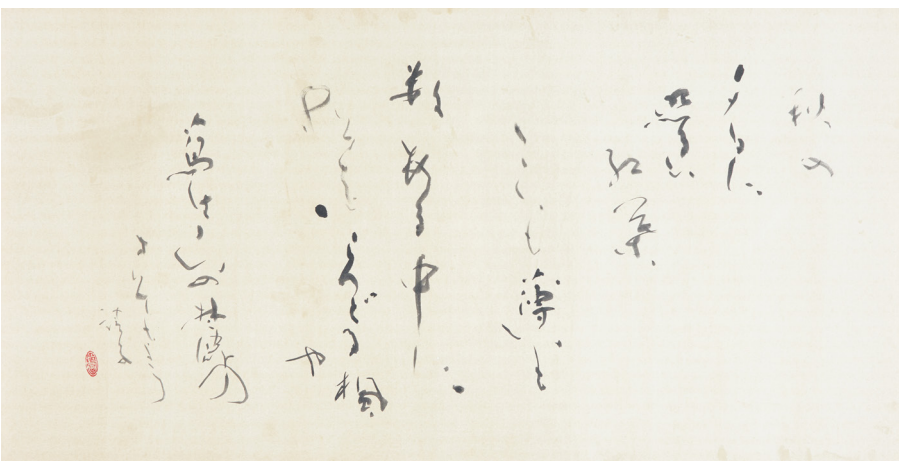
医師笠原良策の勇気と使命感に心をうたれ、本当の美しさは、このような心にあると思った。

最高顧問

土橋　靖子

右：ひぐらしの声（島木赤彦）
左：紅葉（高野辰之）

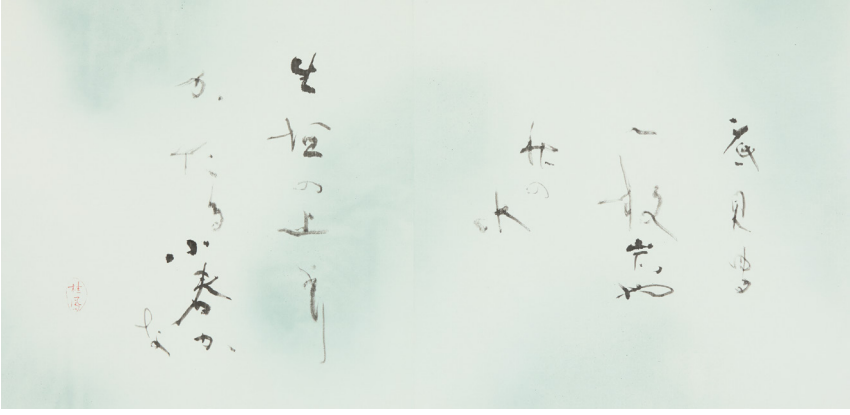
形に捉われすぎず、心の動きも筆を通して表現したいと念じました。おおらかで、野趣を感じる世界にあこがれて。



詩のもつリズムや世界観を大切に、和やかで味わいある書を表現したく、筆を持ちました。

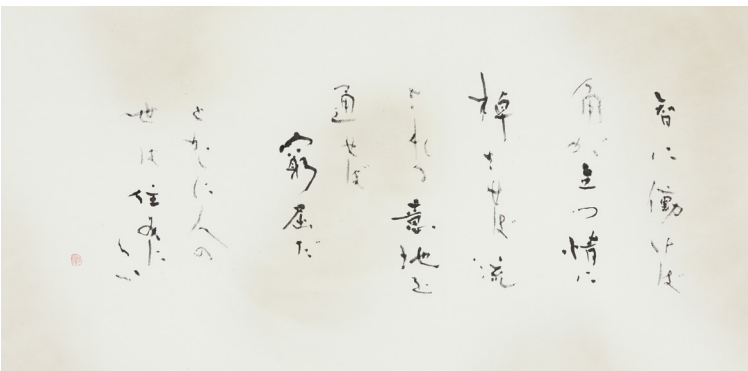
顧問　池田　桂鳳

上：一枚岩（夏目漱石『漱石俳句集』）
下：人の世（夏目漱石『草枕』）



漱石のロマンを書を通して読みとっていただければとの思いで書いてみました。

漱石の文学には心を動かす表現が多々みられます。そのひとつを書にしてみました。

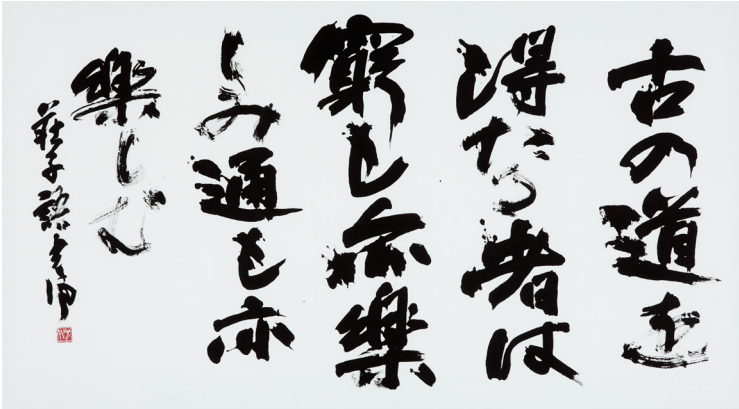


顧問　新井　光風

上：和神（『漢書』車千秋傳）
下：荘子語

天地に生きる小さな生物の命の凄さに感銘。呼吸が長い線と短い線との共演。命の躍動感と気満の姿を探る。

常に考えている事は線の命と存在感。調和体特有の空気感と情趣を求め、文字融合の姿と命の躍動感を探る。



顧問　真神　巍堂

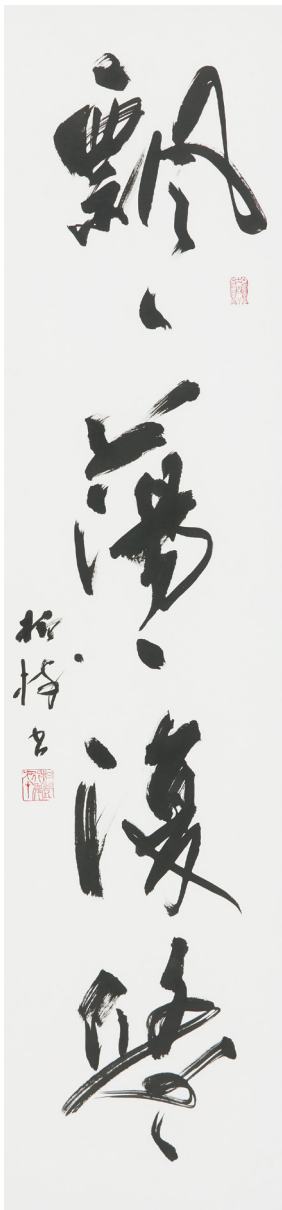
上：富嶽（松崎慊堂『慊堂全集』）
下：白菊の花（北原白秋）

大阪・関西万国博に出品したものと同文を横型式にしてみた。できるだけスケールの大きさを求めたが？

奇をてらわず自然体で書いた。漢字とひらがなのバランスを中心に選文した。

顧問　杭迫　柏樹

右：飄々蕩々復悠々（沈石田「落花詩」）
左：やって見せ（山本五十六）

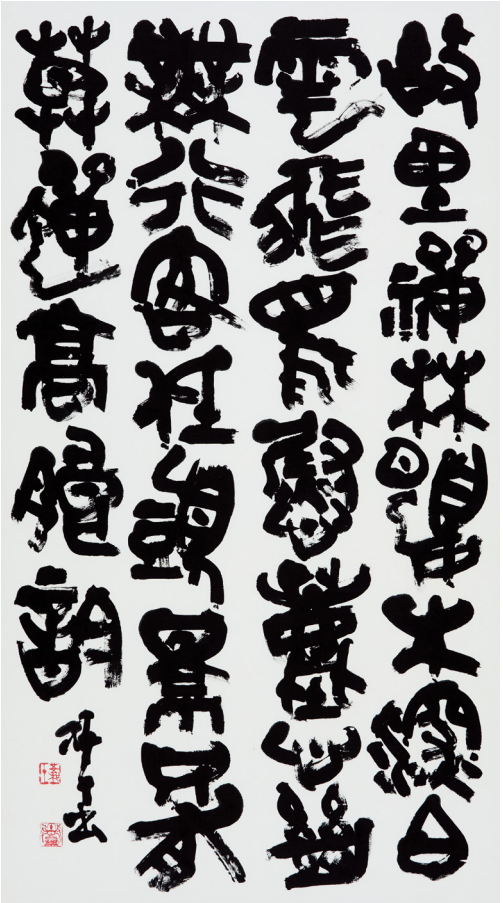


私が78歳の時、沈石田のこの詩が同じ78歳の時の作詩であることを知った。以来、時折この詩に挑戦を。

実技に生きる人間の心理をこれほど適確に表現した歌が他にあろうか。

常任総務　牛窪　梧十

右：山寺暮蟬（吉澤鐵之『好文詩艸4』）
左：夏の森（自詠）

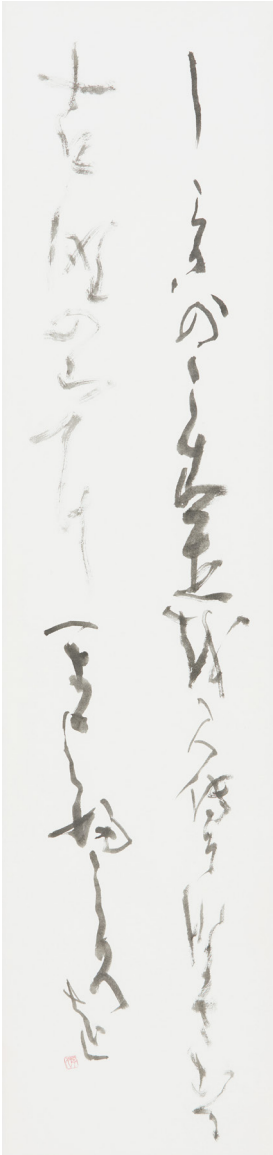


わが産土の地、武蔵野にある三富山多福寺。この詩のうたうところそのままに、多福寺も現在にある。

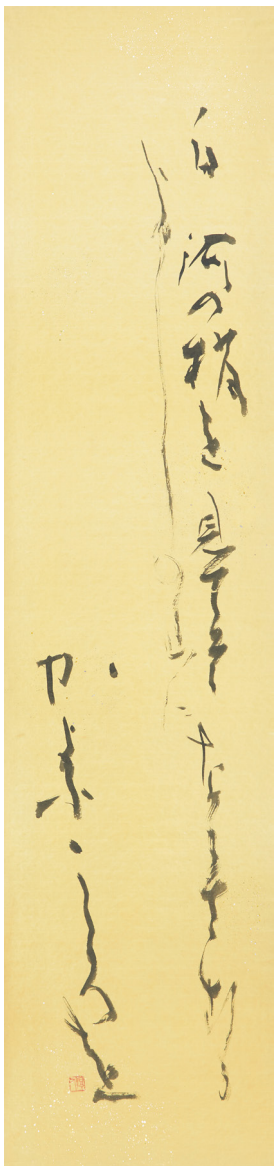
コロナ禍では散歩と作句で時を過ごしたが、その時に得た「嗅覚で行く」という言葉が、ようやく俳句としてまとまった。

常任総務　高木　厚人

右：しらかはのこずゑ（西行）
左：白河の梢（西行）



ここ数年かなと調和体同じ素材で作品を制作している。共に変化と統一、美しい景色をと願って筆を進めている。かなは静かな風景から書き始めて見た。

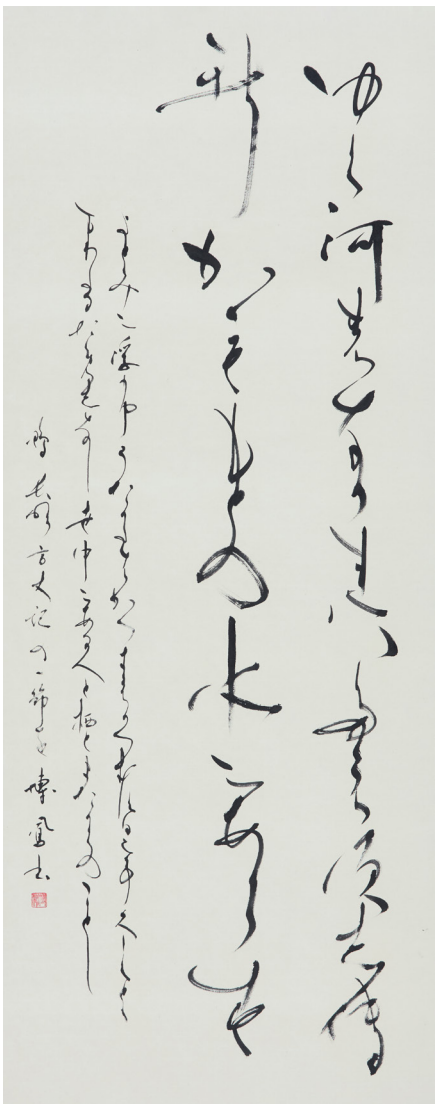


調和体はかなを書く時と同じ意識で書いた。こんな作品になった。

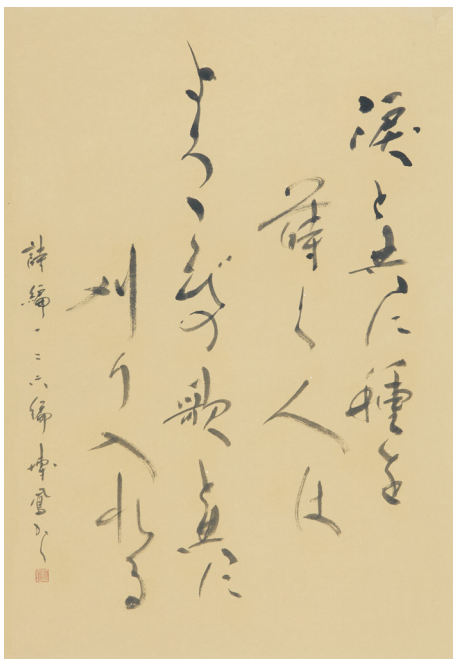
常任総務　日比野　博鳳

右：ゆく河（鴨長明『方丈記』）
左：種蒔く人（旧約聖書『詩編』126編・5節）

長嶋茂雄さんは記録よりも記憶に残る人といわれた。常に移ろう俗世、書の作家も、人々の記憶に残る作品を制作していきたい。



詩文の背景は考えず、こはそのまま、苦労して堪えていれば最後は報われる、と読みたい。



第41回読売書法展（2025年）　会期・会場

〔東京展〕
《第1会場》8月22日(金)～31日(日)※26日(火)休館
国立新美術館
《第2会場》8月23日(土)～29日(金)
東京都美術館

〔関西展〕9月10日(水)～14日(日)
《第1会場》京都市京セラ美術館
《第2会場》京都市勧業館「みやこめっせ」

〔中国展〕9月26日(金)～28日(日)
《会　場》広島県立ふくやま産業交流館「ビッグ・ローズ」

〔四国展〕10月11日(土)～13日(月・祝)
《会　場》サンメッセ香川

〔東北展〕10月22日(水)～26日(日)
《第1会場》山形美術館
《第2会場》山形県芸文美術館

〔北海道展〕11月5日(水)～9日(日)
《会　場》札幌市民ギャラリー

〔中部展〕11月25日(火)～30日(日)
《会　場》ウインクあいち

〔九州展〕12月12日(金)～14日(日)
《会　場》福岡国際センター

※今後の諸事情により、日程が変更または中止になることがあります。
読売書法会公式サイト（https://yomiuri-shohokai.com）等で最新の情報を確認ください。

©2025　読売新聞社　読売書法会
著作権に関しては手続きを取っておりますが、
お気づきの点があれば読売書法会事務局までお知らせください。